

---

# 失色の明星～約束～

Liar

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

失色の明星〜約束〜

### 【Nコード】

N3498Z

### 【作者名】

Liar

### 【あらすじ】

皆が僕を忘れますように。そう願って僕は眠りについた…はずだった。目が覚めるとそこは知らない遺跡で…テルカ・リュミレース？ここは一体…どこなんだ？

コードギアス反逆のルルーシュLOSTCOLORSとTOVのクロスオーバー

ギアス編終了後 TOV

続いたり短編集だったり…すると思います。

## 魔導少女との出会い

未練はある。だから、未練はない。

皆が僕を忘れますように。

突然現れて、突然いなくなる僕なんかのために皆きつと心を痛めてしまう。だって彼らは優しいから。そんなのは嫌だから。

だから、忘れて。

それが僕の願い。

おやすみ。

おやすみ。

そして僕は眠りについた。

二度と目覚めるつもりはなかった。だってこの力が皆を傷付けてしまうから。

なのに。

「　　と、　　き　　よー!」

どこか遠くで誰かの声が聞こえた気がした。

それと同時に身体を揺すられている感覚がある。

その感覚に僕の意識が覚醒へと近づいて行くのを感じる。だんだんと誰かの声が近くなってくる気がした。

「ちよつとあんた！起きなさいって言うてんでしょ!!」

「!?!」

突然ポリウムが大きくなったかのような感覚に驚き、僕は目を開いた。

そこには赤茶色の髪に緑色の瞳、そして和服と言えないこともないような不思議な服を着た少女がいた。

そしてその少女は僕を不審そうな目で睨み付けていた。

「やっと起きたわね！こんなところで堂々と眠りこけてるなんて、あんた一体何者よ？それに、どうやって入ったの！？今まで解かれた形跡のない仕掛けを解いて、私が今新しく発見した空間だっていうのに！！」

遺跡荒しなら容赦しないわよ、と少女は警戒した瞳で睨み付ける。

遺跡荒し？状況がよく飲み込めない僕は辺りを見回してみた。

僕はたしか神根島の遺跡で眠りについていたはずだ。

たしかにここは遺跡のようだ。しかし、ここは…神根島ではない？特徴とも言える巨大な扉がない。それに造りも違う。

「ちょっと！何黙り込んでんのよ！さっさと質問に答えなさいよ！」

少女の質問に答えることなく思考に耽っていたため、少女は我慢できないうように怒り出す。

慌てて僕は返事をした。

「あ、ああ、すまない…僕の名前はライ…質問に質問で返すようでは悪いんだが、ここはどこだ？僕の記憶が確かなら、神根島にいたはずなんだけど」

「は？」

少女は、僕の返事が予想外だったのか呆気に取られた顔をした。

「かみねじま？どこよそれ？聞いたことないわ。そもそもここ、島じゃないし、あんた何言ってるの？はぐらかしてるつもりなの？」

「はぐらかしているつもりはない。神根島は日本の太平洋沖にある島で…たしかにそれほど世間に知られているような島ではないと思うが…」

「にほん？たいへいよう？」

「わからないのか？」

「…さつきからわけわからないこと言ってる、やっぱりはぐらかさうとしてるんでしょ…」

あつたまくるわね！！と少女は憤る。

「違う。真面目に聞いているんだ。もう一度聞くんがここはどこなんだ？」

「…ここはシャイコス遺跡よ」

訝しそつにしながらも彼女は答えてくれた。だが、聞き覚えがない地名に僕は戸惑う。

「シャイコス遺跡？」

「アスピオの東にある遺跡」

「…アスピオ？」

どの地名にも聞き覚えがない…一体ここはどこなんだ…どう考えても和名ではない。日本でないなら…ここはブリタニアか？眠っている僕を誰かがブリタニアにでも運んだというのか？

「すまない、ここはもしかしてブリタニア領なのか？」

「ブリタニア？知らないわよそんなとこ。支配しているっていう意味での領地っていうなら帝都ザーフィアス領だけど？まさか知らないわけ無いでしょ？」

どんな生活しててもさすがに誰でもそれくらい知ってるわよと少女はさらに訝しむ。

「帝都？帝国なのか？」

「そうよ？このテルカ・リュミレースを治めているのはその帝国で、他に国家はないわ」

「他に国が…ない？そんな…まさか…」

ありえない、いや、数千年、数万年も眠っていたのならありえないこともないかもしれないが、眠るときに着ていたアッシュフォード学園の制服は劣化もしておらず、綺麗なままだ。そう時が経ったとは思えない。」

「そうだ…地図、地図を持っていないか？できれば世界地図がいい」

「あーもう。なんなのよさっきから！！…一応、簡略的なのは持っているけど」

「見せてくれないか？」

そう聞くと少女は仕方がなさそうにゴソゴソと手帳から紙切れを取り出した。

怒りながらも頼めばちゃんとお願いを聞いてくれている。そんな様子を僕は少し微笑ましく思った。

「ほら、これよ。これでもういい加減はぐらかすのやめなさいよね」

もううんざりだ、というように少女から渡された地図を見て僕は息を飲んだ。

違う。ここは違う。



ここは、日本じゃない。ブリタニアでもない。

ましてや

地球でもなかった。

もし、もしもこれが地球だというのなら、少なくとも一回は人類は滅びているだろう。大陸の形…似ているとも言えなくはないがずいぶんと地形が違う。

地殻変動どころの騒ぎではないし変動したのだとしても何千年程度でなんとかなるような変動ではない。

それほど時間が経過していないのは僕の着ている服から推測できるので、地殻変動の線は消していいだろう。

その上、地図に書いてある文字も読めない。話は通じるのに字が読めないとは一体どういう原理なのだろう…

とにかく何もかもが違う。

いつそ僕はまだ眠っているのかもしれない。そしてこれは夢なのかもしれない。だけど確かに僕はここにいるというのはどうしようもないほど現実で、僕が今いるこの場所は…一体、何だというのだろうか…。

「…どうしたのよ。いきなり黙りこんで。さあ、とつとと白状してお縄につきなさい。っていうか別にあんたの意見なんて聞かずにと

つとと捕まえるのが私的には一番楽なんだけど？むしろそっちの方が私らしいわよね。ま、今日は新しい場所見つけられて機嫌もいいし、あんたが暴れださないから話聞いてやってるけど、あ、暴れだしたときは容赦しないわよ」

少女は相変わらず僕を警戒している。当然といえば当然か。

「……すまない。ちょっと、信じがたいと思うんだがひとつ僕の話聞いて欲しい……」

「なによ？つまんない言い逃れなんか始めたら速攻引っ捕まえるからね」

「…違う。言い逃れなんかじゃない。僕としても信じがたい上に言いつらいことなんだけど、僕は、多分、この世界の人間じゃない…と思う。僕はテルカ・リュミレースなんて知らないし、アスピオも、シャイコス遺跡も、ザーフィアスも知らない。僕がいたのは地球という星の、ブリタニア帝国が支配するイレブン、日本という国にいたはずなんだ」

「…はあ？」

これまで感じたことがないような憐れみ、蔑みの入り混じった冷たい視線がビシビシと突き刺さる。

自分がどれほど馬鹿な事を言っているのかわかっているだけにその

視線はわかるのだが、なかなか辛い。

「いや、自分でもすごいことを言っている自覚はある。そんな冷たい目をしないでくれ…」

「……何を言い出すかと思えば、ばっかじゃないの！？そんなもん信じられるわけ無いでしょ！！」

「すまない。だが、もう、そうとしか…」

「じゃあ、証明できるの？証拠は？」

「証拠…今身につけているものと言ったら、この制服と…」

僕は何かないものかとポケットを探る。何か硬いものが入っていた。

それは、僕の財布と、ないと不便だから、とミレイさんから支給された携帯電話だった。電源を入れてみると、まだバッテリーが残っていたようで立ち上がった。やはりまだそれほど時間が立っていないだろうか？

「なによそれ？」

少女は携帯電話に興味を示したようだった。

「これは携帯電話っていうんだけど。知らないか？」

「電話？知らない。どういふものなの？」

「電波を通じて離れている人と会話できるんだ。あと、一瞬で手紙のようなものも送れる。ここでは、使えないけど。他にも、カメラとか、辞書とかの機能もついてる」

やはりというべきか、圏外だ。遺跡の中だからかもしれないが。

「嘘、そんな技術知らないわ…ちょっとそれ見せて!!」

半ばひつたくらられるような形でケータイを奪われた。本当に興味津々に見ている。遺跡に来るくらいだからこの少女は研究者か何かなのだろうか。

ボタン操作に少々手間取っている少女に簡単な操作を教えてやった。するとだいたい理解したのか少女は先ほどとは打って変わって素早くケータイを操作していく。

「この材質…知らないし、この文字？も見たことない…これ、どういふ原理で動いてるの!？」

僕の知識で分かる範囲の説明を少女にしてやった。この時ばかりは無駄知識をありがとつ、パトラー、という他ない。

少女はかなり理解力が良いのか、1教えたら10どころか100を知る勢いで理解していく。

辞書を開けば、もうおおまかにこちらの文字を理解したらしい。

曰く、古代遺跡の文字を解読するよりよっぽど楽。ちゃんと順序立って書かれてるから理解しやすい、だそうだ。

「なんか、楽しそうだね」

「だってこんな見たこともないモノ見せつけられてんのよ！？楽しいに決まってるじゃない！！」

「はは、それは良かった」

おもちゃを与えられた子供みたいに顔が爛々と輝き、すごく生き生きとしている。

まあ、子供だったか…

「カメラ？っていうのはどれ？」

「これだよ。それで、真ん中のボタンを押したら写真が撮れる」

「…！！なにこれ！？景色が…そのまま！！」

「そう。それで、撮ったデータはここに…」

「これ、今までのデータ？」

「そうだ。僕はあまりケータイを使わなかったから写真はそんなに

取っていないけど……」

しかしデータフォルダを開いてみると僕の予想に反して、数十枚のデータが入っていた。いつの間に撮られたのだろう。

「これ、あんた？」

「そうみたいだ。いつの間にか撮られていたみたいだな……」

……懐かしい。記憶を失っていた僕を受け入れてくれた優しい面々も写っていた。

ルルーシュに、スザクに、ミレイさん、シャーリイ、リヴアル、ニーナ、そしてカレン。生徒会メンバー全員の写真が残っていた。さすがにC・Cは写っていないかったけれど。

本当に、皆優しい人達だった。

未練はある、だから未練はないし、後悔もない。

だけど、やっぱり思い出すと……辛いものはある。

感傷的な考えを振り払うように僕はケータイに夢中な少女に話しかけた。

「それで、どうだ、やっぱりこれは証拠にはならないか？」

「……そうね、異世界っていうのは信じ難いけど、こう、物的証拠を見せられちゃ簡単に否定できないわね。少なくとも私は知らない技術だしすごく興味深い、これを覆す、あんたが異世界人じゃない

っていう証拠もない。信じてみる価値はありそうね。面白い研究対象だわ…」

「そうか…信じてくれてありがとう」

研究対象という言葉は聞かなかったことにして礼を述べる。

「べ、べつに礼を言われるようなことはしてないわよ…!」

「だって、普通は信じないだろう。こんな突拍子も無いこと」

「それは証拠出されたからよ!」

「そうだとしても、ありがとう。嬉しい。ああ、そうだ君の名前を聞いていなかったな、名前を聞いてもいいか?」

「え?あ、ああ、そういえば言っただけだったわね。私はアスピオの魔道士のリタ。リタ・モルディオよ」

魔道士…?聞いたことがない。やはり、世界が違つと全く知らないことだらけなのか…

「そうか、リタ。ひとつ、相談があるんだけど、聞いてもらえないだろうか」

図々しいことは重々承知している。

「相談？なによ？言ってみなさい」

「この世界、テルカ・リュミレース…だったか？この世界のことを教えて欲しい。多分僕はこの世界で誰よりも世間知らずだと思う…」

先程から会話している時点で、なんと訳のわからない単語の多かったことが…

このままでは生活もできない。

普通なら生活よりも先に元の世界へ帰るよう努力したほうがいいの  
だろうが、僕はもうあそこへ帰る気は最初からない。

帰りたい気持ちはない、帰る訳にはいかない。  
だから僕は割と早い段階で覚悟を決めていた。

「……ふん。いいわ。でも、そのかわり、あなたの世界の技術に  
ついて教えなさい。等価交換よ」

「…ああ、構わない」

この世界の技術力がどの程度かはわからないが、おそらく、向こう  
よりもこちらのほうが技術力はなさそうだ。

あまりオーバーテクノロジーなものはあまり教えないほうがいいだ  
ろうと僕は思った。

「じゃ、あなた、あたしの家に住みなさい。私にも研究があるし、



あそこならあんたも資料に困らないはずだし。そうね、とりあえず  
助手つてことにして街に入れてもらうから、話し合わせときなさい  
よ」

「いいのか？」

「だってどうせあんた住むところないんでしょ？」

願つてもない申し出だった。そうだ、住むところはなかったんだ。

「ああ、そういえば…じゃあ、しばらくおじゃまさせてもらう…早  
く自立できるように頑張ります…」

この少女にこれ以上の迷惑はかけられないなと思った。

「でも、両親の許可も得ないで勝手に決めても大丈夫なのか？」

「…いないわよ。両親なんて。物心ついたときにはずっと一人だっ  
たもの」

「…そうだったのか。すまない、思慮が足りなかった」

「別に…興味ないし。人なんてすぐ裏切るし、一人のほうが、楽だ  
もの」

なんてことはないとすました顔をしてはいるが、先ほどまでと比べるとどこか表情が陰っているのがわかった。

誰かに裏切られたことがあるのだろうか：それに、ずっと一人で平気な子供などいるものか：彼女は頭がいい。その頭の良さで何かを感じて、何かを悟ってしまったのだろう。

だけど。

「リタ、それは違うと思う」

その考えは改めて欲しかった。誰も信じずに生きていくなんて、悲しすぎるから。

「は？何がよ？」

「確かに、誰かを裏切る人間はたくさんいる、だけど、本当に優しい人たちもたくさんいる」

僕も昔は陰謀、策略なんかは日常茶飯事、何度裏切られたことか：…  
だけど、確かに優しい人はいる。たった数週間の間だったけど、僕にそれを教えてくれた人達がいた。

「それに、人はひとりじゃ生きていけない。形は人それぞれだけど、少なくとも僕は、誰かがいないと、生きていたいと思えない」

そう、それは数百年前の自分。妹と、母がいなければあの時の自分はどうしていただろうか。

「…それはあんたの話でしょ。あんたが弱いだけじゃない。あたしは違う、ひとりでも生きていける！生きてきたの！！あんたなんかと一緒にしないで」

そう言うとリタは視線を逸らした。

「じゃあどうして視線を逸したんだ？」

「……………」

「本当は、わかっているんだろう？君は頭がいいから、何でも合理的、論理的に考えて、納得してる。すべての人を信じるなんて言わないさ、確かに裏切る人間もいるから。だけど、せめて、僕を信じてみて欲しい。まあ、異世界から来ましたなんていう人間なんて簡単に信じられないと思うけど…。君がどうしてそういう結論に至ったのかはわからないが、結論を出すのはまだ早いんじゃないか？もう一度、人を信じてみて欲しい。そうだな、少なくとも僕は、君を裏切らないと約束する」

「なんで今日会ったばっかのあんたにそんな事言われなきゃならぬいのよ。関係無いでしょ！！」

「関係ある。だって、今のリタ、悲しそうだ」

声を荒らげて自分の感情をごまかしているのが手に取るようにわかる。

先程から態度は悪くても、こちらが聞いたことにはなんだかんだで答えてくれた。きっとこの少女は態度に出すのが苦手なだけで、とても優しい娘なんだろうなと思った。

それは、おそらく、親がいない環境で育ったために、甘えるということを知らないから……。

僕には優しい母がいた。それは、小さいことのように、とても大きいことだったんだろう。あの環境に母がいなければ僕は……考えたくはないな。

「はあ！？バカっぱい。それこそ関係ないじゃない！！」

「あるさ。君が悲しんでいると僕も悲しくなる。さっき君はすごく楽しそうにケータイ弄っていたな。僕はあの時、正直僕は知らないところに放り出されて結構参っていた。だけど君が楽しそうにしてるのを見て僕も楽しい気持ちになれた」

「…何が言いたいわけ？」

「こんな訳のわからない状況でも、誰かがそこにいて、楽しそうにしていれば不思議とこちらも楽しくなる。その逆も然り…君が悲しんでいると僕も悲しいっていうこと、わかって欲しい」

「私は別にあんたが悲しんでようがなんとも思わないけど？」

「はは、手厳しいな。それは、君が僕のことを信じてないからだ。」

「…なによそれ、じゃああなたはあたしのこと信じてるっていうの？」

「そうだな」

「出会って数時間しか立ってないのに？あたしを？」

「君だって、こんな怪しい人間の怪しい言葉を信じてくれたじゃないか」

「それは物的証拠があったからで…これから私が自警団にあんたを突き出すとか考えないわけ？あんた絶対人に騙されるタイプでしょ」

「いいや、これでも人を見る目は養ってきたつもりだ。騙されたことではないな。それとも、突き出すのか？」

「…出さないけど」

ならもうこの話は終わりだと言うように僕はリタの頭をグリグリと撫でる。

こんな怪しい人間の、怪しい言葉を信じてくれた、素直な娘。

そして誰かに甘えるということを知らずに生きてきたのであろう、虚勢を張り続けるこの少女を、せめて僕がいる間は、精一杯甘やかしてやりたいなと思った。

「にゃー！！頭撫でるな！！なんなのよ一体！！」

「とりあえずさっき言ったこと、心に留めておいて欲しい。…じゃあ今日から短い間だと思えますがですがお世話になります。リタ先生」

できる限り早く知識を身につけてリタの迷惑にならないようにしたい。

「は？先生？」

「とりあえず色々教わるわけだし」

「いらないわよそんなの！！気持ち悪い！！」

「そうか？まあ、とにかく信頼されるよう頑張るから、よろしく」

「……なによそれ…バカっぽい…」

リタはふいと顔を背ける。

いつかこの少女に知ってもらいたいと思った。

僕が知った、世界は色鮮やかで、暖かい人たちで溢れているということ。

自己満足でも良い。それでも、きっとそちらの方が今より幸せだと感じる事が出来ると思っから。

( そう言えばリタって今何歳なんだ？ )

( 13 だけど？あんたは？ )

( 1…6、7かな？ )

( 何で疑問系なのよ )

( ちょっと、色々あって… )

( 言いたくないなら良いけど別に。私には関係ないし )

( いつか、話す )

( ……っふん )

## 魔導少女との出会い（後書き）

浮気しました。

リタが好きです。ライも好きです。

だから会わせました。ちょっとした出来心だったんです……ごめんなさい。

天然君とツンデレちゃんの組み合わせ好きです。はい。

昔好きなキャラ列举してみたところ好きなキャラの傾向がブレなさ過ぎて驚いたのは私です。

感想評価等頂けましたら励みになります。

感想じゃなくとも趣味合いそうな方話しかけて下さると喜びます。

同士いたらいいのになぁ。



## 遺跡の中で

僕とリタはまだ遺跡の中にいた。彼女は初めて発見したというこの空間を見過ごすことは出来ず、調査をしてから僕をアスピオという街まで案内してくれるのだという。

改めてみるとこの遺跡結構な広さである。相当に老朽化しているのか、倒れた柱や崩れ落ちた天井等、相当に古い遺跡のようだ。

しかし、リタは一体何の調査するつもりなんだろうか？この遺跡には一体どのような歴史が刻まれているというのだろうか？

異文化人にもほどがある僕が聞いた所で、おそらく理解出来ないだろうと判断し、今は邪魔することなくおとなしくリタを見守ることにした。

でも、ただ待っているだけというのも退屈なので、僕も遺跡を見て回ってみることにする。

遺跡内を歩きまわる。遺跡内といっても僕が最初にいたホールのような空間だけだ。

その理由は僕がちよっとホール内から出ようかと試みたところ、リタに自分の見ていないところで勝手に色々触られては困る叱られたためだ。

僕はそういうものかと納得し、言うことを聞いた。

そしてなんとなしにホールを見渡すとなにかを見つけた。

リタの許可を取ったほうが良いものかと考えリタを見たが、彼女は彼女で何かを見つけたらしくそちらに夢中で、話しかけると邪魔をするなど怒られてしまった。

壊さなければいいだろうと、とりあえず近づいて一体そこに何があるのか見ることにした。

これは…

「…箱？」

大きめの箱がポツンと置かれている。何かの罨だろうか？

リタの判断を仰ごうと思ったが彼女はまだ何かに夢中らしく、話しかけないほうがよさそうだ。

しかしこの箱…気になる…。罨：開けたら毒ガスか？それとも弓が飛んでくる？まさか遺跡が崩壊するような恐ろしい罨でも仕掛けられているのだろうか？

僕はとりあえず箱の周りを入念にチェックする。少なくとも箱の周囲には罨を張られている形跡はない。だが、中に何か仕掛けられている可能性も否めない。

「なにやってんの？」

うんうんと僕が捻っていると、背後からリタに声をかけられた。どうやら調査が一段落したらしい。

そして僕は先程から頭を抱えている問題をリタに打ち明ける。

「これ…箱を見つけたんだけど、何が入っているんだろって」

畏かもしれないと考え込んでいたのだが、リタは驚くほど簡単に返す。

「あー…それ？開けたら？」

「え？いいのか？」

「いーのいーの。開けちゃいなさい」

「でも、遺跡荒らしの畏とかあるんじゃないのか？」

大丈夫だと、なんてこともなさそうにリタが答えてくる。

「じゃあ、開けてみる…」

リタを疑うわけではないが、若干緊張しながら箱の蓋を開く。そこには刀と脇差が一本ずつ入っていた。どういうことが保存状態は非常に良さそうだ。

「……刀？どうして日本刀がこんな所に…」

まさか日本の文化がこの世界にあるとでも言うのだろうか？

僕は思わず刀を手を取った。すごく美しい刀だと思った。刃を見ると三日月状の打ち除けがある。これは、まさか…な。

銘を確認してみるとなにか書かれている。さすがに日本語ではないらしい。

「あんだ、その剣知ってんの？」

「ここでは何と呼ばれているのか知らないが、これは僕の世界で日本刀と呼ばれているものに属する武器だ。リタ、このところ、なにか書かれているみたいなんだがなんて書かれているんだ？」

「なににー、あーこれ古代語で書かれてるわね。えーと、サンジヨウ？あたし武器とか専門じゃないから詳しいことはわかんないわ」

……日本で三條銘の三日月状の打ち除けといえば、三日月宗近と呼ばれる有名な日本刀があるが、これは偶然か？

この世界の古代には日本があったのかと考えてしまったが、文字が違うので却下。

似たような文明があったのだろうと納得することにする。考えてもきりがない。

「そう、か。ありがとうリタ。それで、これどうしようか？」

刀など持ち歩いていたら、それこそ自警団とやらに捕まるのではないだろうか？

というか、普通に刀が落ちていている時点で僕としては驚きなのだが、貰ってもいいのだろうか？そして、この世界は本当に一体どういうものなんだろう。

「あんた刀使える？」

「使えるって…？」

「扱えるのかってことよ」

僕が王だった時代、母が日本の皇族であったため、譲り受けた日本刀を使う機会も多かった。実戦でも主な武器として扱っていた。そのため、扱えると聞かれれば扱えるのだが、質問の意図するところを掴みかねる。

「扱えるが…どうかしたか？」

「じゃ、もらっとけば？」

役に立つし、とリタはサラッと衝撃的なことを言う。

刀が役に立つとは、この世界は戦争でも起こっているのか？

しかし、先程帝国はひとつしかないと言っていた。敵対国が無いの

なら新たな勢力が生まれつつあるという以外に戦争の可能性なさそうだ。

「…刀なんて、外で持ち歩いて問題ないのか？」

「はあ？何言ってるの？外出するのに丸腰のほうがよっぽど危ないじゃない。街ならまだしも、ここみたいに街の外に出るんなら武器なしじゃ生きて行けないわよ」

「どうして？」

心からの疑問だった。そして答えたりタの言葉は僕にとって衝撃的なものだった。

「どうしてって、そんなの、魔物とか盗賊とかが襲ってくるからに決まってるでしょ？」

むしろ、僕よりもリタのほう不思議そうに返してきた。あんた何いってるの？と言われなくとも伝わってくる。

それは置いておいて、聞き捨てならない単語があった。

「魔物？」

「ええ」

魔物と言われて思いつくのはファンタジー小説なんかに出てくるような架空の生物なのだが。

「魔物って、あの?」

「いや、あの魔物とか言われても、魔物なんてごまんといるんだからどの魔物かなんて知らないわよ」

僕が聞きたいのはそういう事ではない。

「ここには魔物というものがいるのか!?どんなものだ?」

「…魔物は魔物でしょ。モンスター。まさか、知らないの?」

「そんなものいなかった。大きく分けてヒトかその他の動物程度の分類しかない。一応聞くけど、魔物っていうのは犬とか猫とかライオンとかとは、違う?」

「猫と魔物一緒にするなんてありえないから!!やめてくれる!?!不愉快よ」

リタは猫好きなんだろうか?犬に対してはどうでもいいのか。

「すまない。でも、多分理解した。そうか、魔物が出るのか…それは危ないな」

魔物が出るとは予想外だ。この刀、三日月宗近（仮）をありがたく頂くことにしよう。

ちなみに、脇差の方は無銘だった。しかし刃は研ぎ澄まされて切れ味は凄そうだ。

「このホール出たところから魔物出るからちゃんと警戒しときなさいよ。背後から襲われるってこともあるんだから」

「本当か！？気を付ける。と言うよりリタは魔物が出るっていうのにこんな所に一人で来たのか？大丈夫か？」

僕のことよりリタのほうが心配だった。見たところ武器も持っていない。

魔物の生態というのがどのようなものかはよくわからないが、危なすぎるだろう。

「大丈夫だからここにいるんじゃない」

「でも武器は？見たところ、何も持っていないように見えるんだが…」

「あるじゃない」



これよこれ、とリタは帯と本を指さす。

「…魔物っていうのはそんなひらひらしたものと、本で撃退できるものなのか？」

確かに分厚い本の角で殴られたら痛いだろう。痛いだろうけど。

例えば魔物を人を襲うライオンと仮定して考えてみよう。今にも襲いかかってきそうなライオンと、本と帯で戦えと言われたら誰もが無謀だと返すだろう。

牛なら帯で避けることくらいならできるかもしれないが…

「ま、できないこともないけどね。ま、あともう一つ武器あるし。っていうかあたしの主力はそっちだから」

「どーだっ？」

どう見ても何も無い。尋ねてもどうせ戦闘になったらわかるわよと教えてくれなかった。

僕は、不安に苛まれつつ、リタとホールを後にした。

「えっと、あそこに何かいるんだけど。大きいオタマジヤクシが。もしかしてあれが…」

「魔物よ」

ついでに大きいカエルまでいる。あれが、魔物…。ライオンのほうがよっぽど魔物なのではないかと少々拍子抜けしてしまったのは秘密だ。

僕は刀を抜き敵の動きを観察する。オタマジヤクシたちはこちらに気がついたのか、ピョンピョンと飛び跳ねながらこちらに近づいてくる。

「リタ！！下がれ！！」

「は？何を…！？」

リタを自分の背後に回し、相手の出方を伺う。するとオタマジヤクシが飛び掛ってきた。

僕は瞬時に刀を振り下ろしオタマジヤクシを斬り飛ばす。オタマジヤクシは真つ二つになり、もう動かない。

この刀すごい切れ味だ…。かなりの業物のようだ。それこそ三日月宗近といってもいいほどだろう。

感心するのもつかの間、今度はカエルとオタマジャクシが様々な方向から攻撃を仕掛けてくる。  
しかし

「遅い!!」

ピョンピョンと単純な攻撃しかしてこないため簡単にかわせる。かわしたところではやく刀を振り魔物を切り裂いた。

あと一匹少々離れたところにいる。僕はすぐさま駆け寄り倒しにかろうとした、すると

「今度はあんたが下がってなさい！揺らめく焔、猛追！ファイアーボール!!」

リタが叫んだかと思うと、火球がオタマジャクシに向かって飛んでいく。火球は見事命中し、魔物は動かなくなった。

「今…のは？火の玉が…リタから？」

「ふーん。やっぱり魔術も知らないのね。予想はしてたけど。あんなの世界には魔術もないわけね」

「魔術：そんなものまであるのかここには…あちらにはなかったよ。魔法も魔物も、空想の物語だ。物理と科学の法則がすべてだったからな」

「あたしに言わせれば魔術も科学の一部だけど？」

「あちらには何も無いところから火球を出すようなものを科学とは言わない。言ってしまうえば奇跡だろうな」

「奇跡ねえ…その考えのほうは理解できないわ。それにしてもあんな…武醒魔導器も無いのによく戦えたわね…」

「ボーディブラスティア？また聞いたことのない…」

「意味がわからず首を傾げる。するとリタは自分のチョーカーの宝石のようなものを指さした。」

「簡単に言うと、これを着けると、着けてる人間の能力を底上げしてくれるの」

「おまけに魔導器というものについて熱く語られてしまった。まさに熱弁を振るわれてしまった…おかげで魔導器についてはよく理解することができたように思う…。」

「…ここは本当に不思議な世界だな…」

「あたしから言わせればあなたのほうがよっぽど不思議なんだけど！未開の遺跡で眠っていたかと思えば、異世界人だの言い出すわ、魔物も魔術も魔導器も知らないし、しまいにはこのあたしに説教までかましてくれちゃうし、ほんと意味が分からないわ」

魔導器がない世界なんてかんつがえらんない！！とリタは力強く語る。

どんな生活してるのかなんて、考えたくもないらしい。そんなリタに僕は苦笑する。

リタは魔導器にご執心らしい。先ほどホールで見つけたのも魔導器だったようで、すでに名前をつけてかわいがっている。

「ま、とにかくアスピオに向かいますよ。話はそれからね」

「ああ、そうだな……」

次々に現れる魔物を倒しつつ、アスピオへと向かうのだった。

(その魔術って強力だけど、発動までの間隙だらけだ。ほんとに今まで大丈夫だったのか?)

(うるっさいわねー。大丈夫だからここにいてるって言ってんでしょー)

(怪我とかしていないんらいけど、心配だ。また調べに来るんなら僕も手伝うから言ってくれ)

(…余計なお世話よ。…ばかっばい)

## 遺跡の中で（後書き）

気まぐれ更新です。  
本当に。

今はアレです。リタを愛でたい衝動と現実逃避したい衝動が合わさってこんなことになっております  
これから再び現実へ戻ります

ライは直剣、大剣その他もろもろも使いこなせるとおもいます多分。  
でもあえての日本刀なのはただの趣味です。

日本刀カッコイイじゃないですか、綺麗じゃないですか？え？そんなでもない？

そう言えば今、アッシュフォード学園の制服に刀と脇差の構図ですね……制服に刀か……良いと思う

ここまで読んでくださっている方、本当にありがとうございます。  
ご感想等ありましたらぜひよろしく願います。励みになります。

## 魔道士の街、アスピオ

「ここがアスピオ…？」

リタ先導のもと、僕はアスピオと言う街に到着した。遺跡を出たとき、そこに広がる広大な大地に驚いたのもつかの間、次々と襲いかかってくる魔物を斬っては捨て、よくやくここまで辿り着いたのだった。

僕は普通の街を想像していたのだが、ここは洞窟を掘り広げたような場所に家を建てて生活している、変わった街だった。

夏は涼しく、冬は寒そうである。実際のところどうなのかしらないが、ついでに街の中は洞窟に街灯が立っているだけのようなものなので当然暗い。

街の中にいると時間の感覚が無くなってしまいそうである。

そう言えば、今こうして普通にアスピオ内にいるわけだが、この街には門番があり、本来通り抜けるためには通行証が必要らしいのだが、リタが門番に僕のことを助手だと述べると、呆気ないほど簡単に街に入ることができた。

ちよっと警備がザル過ぎるのではないのかと思ったが、聞けば通行



証は国や中の研究員が発行するものらしく、リタと並んでいればとりあえずは問題のないことなのかもしれない。

それでも、顔パスが通じると言うのはすごいことのように思う。

当然、顔を知られていないと顔パスなど到底できるはずがないのだが、聞けばアスピオには何百人という研究者が集っているというではないか。

門番がアスピオの研究者全員の顔と名前を暗記しているとも思えない。

もしかすると、いや、やはりと言うべきか、リタはこの若さでもかなりすごい研究者なのかもしれない。

少なくともここでは名が知れ渡っているようだ。

出会って数時間だが会話の端々で彼女の聡明さ…知識の深さとと理解力、記憶力に驚かされることが多々あった。

彼女はすでに僕の世界の文字とこちらの世界の文字との法則性を理解し、ほぼ完璧に読めるようになっていた。

文字が違うだけで読み方と意味は同じらしい。リタに言わせれば覚えるのは楽勝、だそうだ。

どうやらテルカ・リュミレースの文字、テルカ文字とでも言おうか、テルカ文字はアルファベットと全く同じ規則性のようだった。

アルファベットをそのまま変形したようなものがテルカ文字らしい。

リタから見れば、テルカ文字を変形したのがアルファベットか。

リタにケータイを見せて、一通りの読み方を教えたとき、リタはすぐにそれに気づき、理解したのだ。

さらにケータイには辞書機能何て言うものが付いていたのだから、理解に要する時間はより少なかっただろう。

それは、一度理解してしまえばたしかに単純なことかもしれないが、それを数分で憶えて、解読してしまうリタの頭脳は計り知れないと思う。

僕もリタにテルカ文字とアルファベットの同じ文字を書いてもらって見たのが、テルカ文字はこう、根本は同じだとわかっていても、あれ？ここ、こうなるんだ？

という、頭がこんがらがってしまいそうな変形をしており、覚えるのは僕には難しそうだと感じた。

常人ならば、一つ一つ表をつくって、交互ににらめっこしながら解読していくところではないだろうか？

しかしリタはあっという間に理解して解読したのだ。本当にすごいと思う。

むしろ、アルファベットのほうがテルカ文字よりも一つ一つの文字の違いがはっきりしていてわかりやすいわね、今度からこっちを使おうかしら、とまで言う始末である。

これからテルカ文字を覚えようかと意気込んでいた僕は思わず苦笑してしまった。

リタの頭の良さについての考察はこれくらいにするとして、この街、本当に夜みたいに暗い。

研究員と思しき者たちは皆フードを被っており、顔が見えない。今この街で顔を出して歩いているのは僕とリタだけではないだろうか。それが珍しいのか、フードで顔が見えないながらも時折アスピオの住人たちの視線を感じた。ああ、そういえばさらに僕は学生服を着

ていた。

これがさらに注目を集めてしまつ要因になつてしまつてきている気がする…。

こればかりは仕方のないことだが、奇異の目で見られてしまつのはどうにも少し居心地が悪いと感じた。

僕もフードとマント、欲しいかもしれない。

「ほら、こつちよ」

リタは中央広場、門側から見て右奥にある小屋に案内してくれた。

中央広場から見た感じ、家はここにしかないようだ。1つだけぽつんと家が建っている。

更に奥には研究施設のような大きい建物があったが、他の研究員はそちらで過ごしているらしいのだが、リタだけはどどういうわけか小屋をあてがわれているようだ。

リタが小屋の鍵を開け、中に入る。

「うわー!!」

「ちよっ！なによ？」

外から見た感じから、不思議なデザインだなとは思っていたが、小屋の中は床から天井へと突き抜ける形で木が生えていた。

建ててから生えたのか、生えていたところに建てたのかは謎だが、相当に驚いた。

後者ならともかく、前者だったら怖すぎると思う。

ついでに、床を多い隠さんばかりに広がっている分厚い本、本の山。

これまでベッドに机くらいしかない生活に慣れていたせいもあり、少々目を向いてしまった。

「木が、突き抜けてるけど、大丈夫なのか!？」

「さあ?大丈夫なんじゃない?」

リタはさも興味が無いといった様子だ。

これはこれで安定感がある…のかもしれないな。

家主が気にしていないのだから、僕が気にするのは野暮というものが。

「ま、とりあえず、テキトーに座ったら?」

そうリタに言われたので適当に座る場所を作り腰を下ろした。持っていた刀と脇差も床に置いた。

「で、これからあなたどうするつもりなの?」

「正直考えていない…この世界のこともよくわからないし、元の世界に帰りたいたいか言う大義名分もないんだ。でも今はとりあえずこの世界のことを学んで、出来る限りリタの迷惑にならないようにしたいと思ってる」

考えていることをリタに正直に述べた。この世界がどのように成り立っているのかもわからないままでは、自立なんて到底できない。あえて言うなら早く自分で稼いで生活するのが目標といったところか。

稼ぐと言えば…どういう原理か知らないが、魔物を倒したらこの世界のお金を落としていたな。まさか…人を食べ…いやいやそんなことは、と嫌な考えを振り払う。

「ふーん。ま、とりあえず文字ね。文字さえ覚えればこの街の図書館使って色々知識詰め込めると思うわよ」

腐っても学術都市だから、知財だけは豊富なのよね」とリタは言う。

「う。文字か…さっき少しだけリタに教えてもらったけど、アレを覚えるの少し時間がかかりそうだな…」

「そ？ちよつと変形してるだけじゃない。単語も構文も同じなんだから形さえ覚えたら後は考える必要ないじゃない」

「そうは言うが…いや、うん、頑張るよ。表でも作ればすぐに覚

えられると思う…。それで本当に申し訳ないんだが僕はこの世界の文字はさっぱりわからない。僕がアルファベットの表を作るから、その隣にテルカ文字で当てはまる字を書いて欲しい…」

「そんなのでいいんなら、構わないわ」

「ありがとう」

「べ、別にお礼言われる筋合いはないわよ！」

「いや、あると思っぞ？」

とにかく助かった。すぐにでも文字を覚えて勉強したい。

「あーもう！そういうのいらないから！と、とにかく、今日からあなたはこの家で好きに過ごして構わないから！勝手にしてちょうだい」

あなたはあたしの貴重な研究サンプルなんだから、勝手に出てったりしたら許さないからね！と付け加えられた。

研究サンプルって…たしかに研究者からしてみれば異世界人間など興味の対象だろうが…こうはつきり言われるとあっさり清々しいな。

「ありがとう。何から何までお世話になって…」

「あ、あたしがいつあなたの世話したっていうのよ！そういうのい

らないって言うてんでしょー!」

そして、さっきから気になっていることがあるのだが。

「ところでリタ」

「なによ?」

「部屋……片付けてもいいかな?」

「……勝手にすれば?」

それから数時間にわたって、ほんの位置がわからなくなっただけは困るというリタ監督のもと、僕と本との戦いが行われたのだった。

掃除の最中、どこかも覚えのある物を発見した。

「あ、これ、もしかして掃除機?」

「なんで知ってんの!?!」

あたしが作ったのに！！とリタが本気で驚いている。

「あ、いや、これと似たものがむこうにもあったから、それで…つてリタが作ったのか！？これ！！」

「え？あ、うん。そうだけど？」

「それは…すごいな…」

「なんで？あなたの世界にもあるんでしょ？」

「あるにはあるが…自作する人間はそうはいないと思う…作り方を知ってる人はなかないと思うし」

いるとすれば相当メカに強い、機械づくりが趣味の者だけだろう。

「じゃあどうやって作ってるの？」

「工場で、大量生産…されてるんじゃないかな。」

「大量生産！？これを！？魔導器足りるの！？つて、ああ、そういえばあなたの世界には魔導器ないんだったわね…いいわ、あまり聞きたくない。魔導器がない世界なんて考えるだけでも恐ろしいわ…」

「そ、そうか…」



やはりリタにとって魔導器は何よりも大切なモノなのだろうかと、感じ取った。

突如、ぐうと低い音が響いた。リタを見ると顔を赤くして横を向いている。

音の正体はどうやらリタのお腹らしい。いい時間になったようだ。必死に顔をそむけているリタを見て、僕は思わず笑ってしまった。

「ちょ、何笑ってんの！？今は別に！！」

「ご飯にしよう。食材はあるのか？」

「……ない」

「え？じゃあ、いつもどうしてるんだ？」

「食堂とか……」

「そうなのか……じゃあその食堂、行く？」

「……うん」

そうしてアスピオの食堂を経験した僕は、これからは自炊すべきだなど、強く思ったのだった。

(リタ、あれは成長期の子が食べ続けていい食事じゃないぞあれは)  
(普通じゃない？美味しいし)

(いや、食に疎い僕でもわかる…さすが研究の街…時間重視の上に  
片手で食べやすい物ばかりだった…)

(ま、正直研究には食事の時間ももったいないからねー)  
(……これから頑張ろう)

## 魔道士の街、アスピオ（後書き）

気がつけば、ライが主夫化しそう…

ライのシスコンスキルを発動させるか、過保護スキルを発動させるか、天然スキルを発動させるか、王子様系スキルを發揮させるか…  
いっそ全部発動させるか…

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。  
感想評価アドバイス等有りましたらぜひ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3498z/>

---

失色の明星～約束～

2011年12月17日02時46分発行